

昔話と昔話の歌の認知度（2）

— 短大生のアンケートから —

しの づか ふじ お
篠 塚 富士男

(本学教授)

はや かわ ふみ こ
早 川 富美子

(本学教授)

いで い よし え
出 井 芳江

(本学准教授)

1. はじめに

筆者らは2022年1月に本学の学生を対象に昔話と昔話の歌の認知度について調査を行い、先行研究における調査結果との比較等もまじえて、本学の学生の実態の把握とその分析を行った。この結果については前稿¹で報告したが、この分析が一般性をもっているといえるかどうかの検証のため、年度が変わった2022年11月に再び同様の方法で本学の学生を対象に調査を行った。本稿ではその結果を報告するとともに新たな論点等も踏まえた分析による考察を行う。

2. 調査の概要

①調査対象

本学で以下の科目を受講している学生

- ・「児童サービス論」（司書科目）を受講している日本文学フィールド・言語文化フィールドの1年生22名
- ・「歌と楽器Ⅱ」を受講している子ども教育フィールドの1年生12名（小学校、幼稚園専攻）、「児童文化」を受講している子ども教育フィールドの1年生26名（幼稚園・保育専攻）合計38名

* 調査対象者総計60名（1年生60名）

2 國學院大學栃木短期大學紀要

②調査時期

- ・2022年11月の各授業時間中に実施

③調査方法（2022年1月の調査方法と同じ）

- ・昔話と昔話の歌に対する認知度に関して質問紙による調査を行った
- ・質問の対象とした昔話は以下の9話
桃太郎、金太郎、浦島太郎、うさぎとかめ、さるかに合戦、雀のお宿（舌切雀）、一寸法師、牛若丸、花咲爺

④質問内容

（設問1）

- ・自宅（実家）で所有している童話・昔話のタイトルを記述する

（設問2）

- ・対象とした昔話の認知度を4段階（4：熟知している、3：曖昧である、2：タイトルは知っている、1：全く知らない）で回答する

（設問3）

- ・対象とした昔話の歌の認知度を4段階（4：歌える、3：少しなら歌える、2：聞いたことはあるが歌ったことはない、1：全く知らない）で回答する

（設問4）

- ・昔話の内容を知っているかどうか以下の質問に自由記述で回答する（昔話の知識を問うものである）

（質問）

- ①桃太郎の桃は誰が拾ってきましたか？
- ②桃太郎が腰につけていたものは何ですか？
- ③桃太郎と一緒に鬼退治に行ったのは誰ですか？
- ④浦島太郎は誰の背中に乗っていましたか？
- ⑤浦島太郎は玉手箱を開けたら、どうなりましたか？
- ⑥うさぎと亀のどっちが勝ちましたか？ 勝った方に○をつけてください。

それはなぜでしょう？ 勝った理由も書いてください。

A うさぎ B 亀

勝った理由：

- ⑦舌切雀は、なぜ舌を切られたのでしょうか？

⑧舌切雀では、おじいさんのお土産は大きいか、小さいか？

A 大きい B 小さい

⑨舌切雀では、おばあさんのお土産の中身は何でしたか？

以下、設問ごとに調査結果を記載する。

3. 調査結果

（設問1）

・昔話等の所有状況

表1 昔話等の所有状況（日本文化学科・人間教育学科の学科別集計、および全体集計）

日本文化学科	人数	人間教育学科	人数	全体	人数
3匹の子ぶた	2	桃太郎	10	桃太郎	12
赤ずきん	2	赤ずきん	7	赤ずきん	9
浦島太郎	2	シンデレラ	6	シンデレラ	8
さるかに合戦	2	親指姫	5	さるかに合戦	7
白雪姫	2	さるかに合戦	5	花咲爺	7
シンデレラ	2	花咲爺	5	3匹の子ぶた	5
ねむり姫	2	うさぎとかめ	4	浦島太郎	5
花咲爺	2	舌切雀	4	白雪姫	5
マッチ売りの少女	2	ヘンゼルとグレーテル	4		
桃太郎	2				

- この設問では、日本・外国を問わず、現在自宅（または実家）に所有しているものを複数回答可という条件で回答させ、過去に所有していても処分している場合は「ない」と回答するよう指示した。
- 日本文化学科の回答者22人中昔話等の所有者は7人（所有率は32%）、人間教育学科の回答者38人中所有者は20人（所有率は53%）であった。なお表1では日本文化学科は2人以上が、人間教育学科は4人以上が所有している昔話等の書名を記載した。
- 昔話の所有率を前回調査と比較すると、日本文化学科では71%から32%へと大きく落ち込んでいるのに対し、人間教育学科では45%から53%とやや増加している。日本文化学科の調査対象者数は、前は24人だったのに対し今回は22人で人数的に大きな違いはないのに所有率がこれほど大きく落ち込んでいることについて、はっきりとした理由を説明することはできない。この数値がたまたま今回の調査に限って出てきたものかどうかは判断できないので、今後も継続して調査することで所有率の低減という

4 國學院大學栃木短期大學紀要

傾向が表れてくるのかの検証が必要である。一方人間教育学科の調査対象者数は、前回は67人、今回は38人で調査対象者数が大きく減少している。この人数の差が所有率に影響を与えていることは十分考えられるので、人間教育学科の方も継続調査による検証が必要である。

○持っている本は、日本文化学科では突出して多いものはないが、人間教育学科では桃太郎、赤ずきん、シンデレラの順となっている。前回調査と比較すると、前は2位・3位であったさるかに合戦、浦島太郎が順位を下げ赤ずきんが順位をあげているが、調査母数の問題もあるので今回調査の特徴として特筆できるような結果を得たとはいえない。

(設問2)

・昔話の認知度

表2 昔話の認知度 (日本文化学科・人間教育学科の学科別集計)²

昔話の認知度 (%表示・日本文化学科)

	桃太郎	金太郎	浦島太郎	うさぎとかめ	さるかに合戦	雀のお宿	一寸法師	牛若丸	花咲爺
熟知	95	18	95	77	45	18	36	14	55
曖昧	5	50	5	18	41	50	50	14	45
タイトル	0	32	0	5	14	18	14	55	0
知らない	0	0	0	0	0	14	0	18	0

昔話の認知度 (%表示・人間教育学科)

	桃太郎	金太郎	浦島太郎	うさぎとかめ	さるかに合戦	雀のお宿	一寸法師	牛若丸	花咲爺
熟知	84	8	71	63	55	16	29	3	37
曖昧	16	82	29	34	40	37	42	11	58
タイトル	0	8	0	3	5	30	29	45	5
知らない	0	3	0	0	0	18	0	42	0

○昔話の認知度は前回調査と同じ傾向を示している。内容の詳細は以下のとおりである。

●昔話の認知度は全体的に日本文化学科の方が高い。

●桃太郎、浦島太郎、うさぎとかめ、さるかに合戦は、「熟知」の割合が高かったが、なかでも桃太郎の認知度は両学科とも高かった。一方所有数でも桃太郎は一位になっており、ストーリーテリング・素話の題材としてもよく選ばれているので、今回の調査結果でも桃太郎が学生にとって最も身近な話であることがわかる。なお、ここでは昔話の歌との関連で「舌切雀」を「雀のお宿」という表記にしている。

（設問3）

・昔話の歌の認知度

表3 昔話の歌の認知度（日本文化学科・人間教育学科の学科別集計）

昔話の歌を歌えるか（%表示・日本文化学科）

	桃太郎	金太郎	浦島太郎	うさぎとかめ	さるかに合戦	雀のお宿	一寸法師	牛若丸	花咲翁
歌える	18	5	9	5	0	0	0	0	0
少しなら	77	23	18	9	5	0	0	0	14
聞いた	0	23	9	9	5	9	9	9	9
知らない	5	50	64	77	91	91	91	91	77

昔話の歌を歌えるか（%表示・人間教育学科）

	桃太郎	金太郎	浦島太郎	うさぎとかめ	さるかに合戦	雀のお宿	一寸法師	牛若丸	花咲翁
歌える	42	5	3	18	0	0	0	0	3
少しなら	55	8	16	32	8	5	5	3	5
聞いた	0	42	32	11	5	3	5	0	8
知らない	3	43	50	40	87	92	90	97	84

○昔話の歌の認知度も前回調査とおおむね同じ傾向を示しており、両学科とも「知らない」が多い。

（設問4）

・昔話の内容を知っているか

①桃太郎の桃は誰が拾ってきましたか？

	回答	日本文化学科	人間教育学科
質問①	おばあさん	19 (86%)	34 (89%)
	おじいさん	2	3
	その他	1	1

* 表中の数字はその回答の回答者数、カッコ内は%表示である

* 「おばあさん」には「ばあさん」「ばあ」などを含む（おじいさんも同様に同義の言い方を含む）

○両学科とも「おばあさん」が圧倒的に多いが、日本文化学科では前回調査では全員が「おばあさん」と回答していたのに対し、今回調査では100%ではない。

6 國學院大學栃木短期大學紀要

②桃太郎が腰につけていたものは何ですか？

質問②	きびだんご	22 (100%)	35 (92%)
	その他	0	3
	無回答	0	0

○両学科とも「きびだんご」が圧倒的に多い。

③桃太郎と一緒に鬼退治に行ったのは誰ですか？

質問③	犬、猿、きじ	20 (91%)	35 (92%)
	その他	1	3
	わからない	0	0
	無回答	1	0

○両学科とも「犬、猿、きじ」が圧倒的に多い。

○その他の回答では「犬、猿、とり」のように「きじ」ではなく「とり」と答えている。

④浦島太郎は誰の背中に乗っていましたか？

質問④	亀	22 (100%)	38 (100%)
	わからない	0	0
	無回答	0	0

○両学科とも全員「亀」である。

⑤浦島太郎は玉手箱を開けたら、どうになりましたか？

質問⑤	おじいさんになった	22 (100%)	36 (95%)
	その他	0	2

*おじいさん以外の表記でも同義ならばおじいさんに含めてカウントした（年老いた、白髪になって年をとった、老人になった、老化した、など）

○両学科とも「おじいさんになった」が圧倒的に多く、日本文化学科では100%である。

⑥うさぎと亀のどっちが勝ちましたか？ 勝った方に○をつけてください。

それはなぜでしょう？ 勝った理由も書いてください。

A うさぎ B 亀

勝った理由：

質問⑥			
勝ったのは	亀	22 (100%)	66 (99%)
	無回答	0	1
勝った理由	うさぎが油断して眠ったから	13 (59%)	18 (47%)
	うさぎが途中で休んでいたから	7 (32%)	15 (39%)
	亀が休まなかったから	2 (9%)	5 (13%)
	わからない	0	0
	無回答	0	0

* 「うさぎが油断して眠ったから」以外の表記でも同義ならば「うさぎが油断して眠ったから」に含めてカウントした（寝てしまった、昼寝、いねむり、うさぎが寝ている間も亀が足を止めなかった、など）。

* 「うさぎが途中で休んでいたから」以外の表記でも同義ならば「うさぎが途中で休んでいたから」に含めてカウントした（休憩していた、など）。

○勝った理由は「うさぎが油断して眠ったから」が多いが、「うさぎが途中で休んでいたから」という回答も30%を超えている。またうさぎに言及していない「亀が休まなかったから」という回答もあり、勝った理由は回答が分かれている。

⑦舌切雀は、なぜ舌を切られたのでしょうか？

質問⑦			
	のりを食べたから	6 (27%)	6 (16%)
	米を食べたから	1	1
	鳴き声がうるさかったから	3 (14%)	10 (26%)
	うそをついたから	1	4 (11%)
	豆を食べたから	1	0
	悪いことをしたから	0	3 (8%)
	油をなめたから	0	1
	わからない	3 (14%)	10 (26%)
	無回答	7 (32%)	3 (8%)

* 「のりを食べたから」以外の表記でも「のり」という言葉が出てくれば「のりを食べたから」に含めてカウントした（のりをなめたから、障子用ののりを食べたから、せんたくのりをなめたから、など）

* 「鳴き声がうるさかったから」以外の表記でも同義であれば「鳴き声がうるさかったから」に含めてカウントした（うるさいから、ちゅんちゅんうるさいから、など）

○両学科とも50%を超えた回答はなく、「わからない」「無回答」も多い。

8 國學院大學栃木短期大學紀要

⑧舌切雀では、おじいさんのお土産は大きいか、小さいか？

A 大きい B 小さい

質問⑧	小さい	13 (59%)	26 (68%)
	大きい	1	5 (13%)
	わからない	3 (14%)	5 (13%)
	無回答	5 (23%)	2 (5%)

○日本文化学科では「無回答」が多い。

⑨舌切雀では、おばあさんのお土産の中身は何でしたか？

質問⑨	おばけ	7 (32%)	4 (11%)
	虫	3	9 (24%)
	おばけ・へび	0	1
	へび	0	1
	グロテスクなもの	1	0
	お金	0	1
	おむすび	0	1
	きびだんご	0	1
	食べ物	0	1
	くるま	0	1
	木の実	0	1
	雀の舌	0	1
	わからない	3	11 (29%)
	無回答	8 (36%)	5 (13%)

* 「おばけ」以外の表記でも同義ならば「おばけ」に含めてカウントした（化け物、妖怪、怪物、など）。

* 「虫」以外に「ミミズ、ムカデ、化け物」「むし、ごみ」「ミミズ、ゴキブリ、くさそうなもの」「毒虫、へび」なども「虫」に含めてカウントした。

○「おばけ」「虫」「へび」とその組み合わせによる回答が多い。

○両学科とも「わからない」「無回答」が多い。

4. 昔話の認知度に関する考察

4.1 昔話の所有状況と認知度

前回調査では所有数が多いものの方が認知度は高いだろうという仮説を立て、「認知度が高い」ということを、設問2でその話を「熟知している」とした割合で評価するという方法により分析を行ったが、所有数が多いものと認知度（熟知）は必ずしも比例して

はいないという結果となった。またこの調査結果を簡単に振り返ると

- ・ある程度の所有者がいるにも関わらず特に一寸法師と舌切雀の認知度は低かった。
- ・赤ずきん、シンデレラ、白雪姫などの所有数も多かった。

という傾向がみられたが、先行研究をも踏まえ

- ・一寸法師と舌切雀の認知度が低い、という問題については、本調査だけではその理由を推察することはできないが、先行研究においても舌切雀は認知度や内容に関する知識は他の作品よりも低い傾向がみられる。
- ・ディズニー関連の作品は、特に動画の形で子どものいる家庭に浸透していることがうかがわれ、白雪姫やシンデレラなどは子どものときから自宅にあったものの他に、「子どもが日常の中で目にする機会」が多かったものを学生が自ら購入したというケースもあると思われる。

と分析・考察した。このうち舌切雀の問題については別途章を改めて調査・考察し、「改変のある＝内容に相違のある昔話の中で、学生たちはどのストーリーを受容したか」という問題意識から「少なくとも「したきりすずめ」においては、話の内容に関し圧倒的に支持される「常識」というものが存在しにくい／存在しえない状況があるといえるのではないか」と結論づけた³。そこで今回も前回調査との比較のため、前回と同じ方法で昔話の所有状況とその昔話の認知度（熟知）との関係の表を作成した。

表4 昔話の所有状況とその昔話の認知度（熟知）との関係（学科別・全体）

日本文化学科						
所有者（人）	桃太郎 (2)	浦島太郎 (2)	うさぎとかめ (1)	さるかに合戦 (2)	花咲爺 (2)	舌切雀 (0)
熟知（人）	21	21	17	10	12	4
熟知（%）	95	95	77	45	55	18
人間教育学科						
所有者（人）	桃太郎 (10)	浦島太郎 (3)	うさぎとかめ (4)	さるかに合戦 (5)	花咲爺 (5)	舌切雀 (4)
熟知（人）	32	27	24	21	14	6
熟知（%）	84	71	63	55	37	16
全体						
所有者（人）	桃太郎 (12)	浦島太郎 (5)	うさぎとかめ (5)	さるかに合戦 (7)	花咲爺 (7)	舌切雀 (4)
熟知（人）	53	48	41	31	26	10
熟知（%）	88	80	52	52	43	17

今回の調査においても、「所有数が多いものと認知度（熟知）は必ずしも比例してはいない」、「舌切雀の認知度が低い」など、全体として前回調査と同じような傾向がみられた。

4.2 昔話の認知度に関する先行研究

4.2.1 子どもと民話調査委員会による調査

前稿でも紹介したように昔話の認知度に関する調査は数多く行われているが、大規模で、かつ50年以上むかしの実態をうかがえるものとして、「子どもと民話調査委員会」が結果を発表している調査がある。これは『民話と子ども』（岩沢文雄・小松崎進共編、鳩の森書房、1970）に掲載されている⁴が、詳細な調査日時は記載されていないものの、掲載されている書籍の出版年からみて1960年代末の調査と推定され、小学校1年生～6年生を対象とし調査人数が2495名にのぼるという極めて大規模な調査であるところに最大の特徴がある。調査を実施した小学校は東京都足立区（1校）、葛飾区（4校）、江戸川区（4校）、台東区（1校）、板橋区（1校）と記載されており、東京の下町を中心とした小学校11校での調査結果をまとめたものである。

この調査は、日本の民話のおもなものを三十ほど列挙し、その中から知っているものに○をつけさせ、さらにおもしろいと思った民話、きれいな民話をあげ、それぞれかたんに理由を書かせる、という方法で行われたが、この調査方法はこれ以後に行われたこの種の調査にも影響を与えた。たとえば次項でとりあげる片山登美子が同志社女子大学で実施した調査でも、「知っている日本の昔話（民話）」「好き・きれいな日本の民話（昔話）」とその理由」を聞いている。

この調査の「知っている民話」＝民話（昔話）の認知度の設問の回答を見ていくと、50年前の小学生は民話をよく知っていることがわかる。特に5・6年生は表5に示すように上位10位までの民話の認知度はすべて80%を超えているが、それぞれの調査人数は420人、408人であるので調査母数としても十分であると評価できる。この結果を本学の昔話の認知度の調査結果のうち「熟知している」に「曖昧である⁵」を加えた数値と比較すると、ももたろう、うらしまたろうは本学の両学科とも100%となっていて小学生の結果と同様に認知度は高いが、したきりすずめは小学生（全体）が85%なのに対し本学では日本文化学科が68%、人間教育学科が53%となっておりかなり低い。ちなみにこれを本学調査で「熟知している」と回答した者に限ると、日本文化学科が18%、人間教育学科が16%と、一気に数値が低くなり、本学では「知ってはいるが曖昧である」という回答が多い、という特徴があることがわかる。これは前稿で指摘した「したきりすずめ」

に関わる問題が前回調査特有の問題ではないことを示すものといえよう。

表5 知っている民話（子どもと民話調査委員会の調査による）

	1年		2年		3年		4年		5年		6年		合計		順位
ももたろう	325	79%	392	97%	248	62%	389	86%	411	98%	392	96%	2157	86%	3
うらしまたろう	324	79%	360	89%	334	84%	438	97%	370	88%	380	93%	2206	88%	1
いっすんぼうし	294	71%	390	96%	357	89%	392	87%	376	89%	387	95%	2196	88%	2
かちかち山	283	69%	328	81%	280	70%	303	67%	340	81%	339	83%	1873	75%	8
こぶとり	269	65%	346	85%	309	77%	340	76%	345	82%	339	83%	1948	78%	6
したきりすずめ	267	65%	360	89%	325	81%	378	84%	400	95%	382	94%	2112	85%	4
はなさかじい	264	64%	356	88%	326	82%	352	78%	406	97%	385	94%	2089	84%	5
さるかに	246	60%	299	74%	291	73%	339	75%	345	82%	362	89%	1882	75%	7
つるのおんがえし	236	57%	—	—	280	70%	341	76%	338	80%	336	82%	1531	61%	10
かさじぞう	203	49%	260	64%	315	79%	327	73%	339	81%	352	86%	1796	72%	9
ちからたろう	—	—	270	67%	—	—	—	—	—	—	—	—	270	11%	11
調査人数	412		405		400		450		420		408		2495		

この調査結果が掲載されている『民話と子ども』には、「母親と昔話（三五〇〇名の調査から）」という章⁶もあり、「母親と昔話調査委員会」が回答者の年齢区分（20代から60代までの5区分）と小学生のときに過ごしていた場所（市町村まで記載）を聞いた後に、昔話を聞いたことがあるか、好きな昔話・きれいな民話とその理由、子どもに昔話を話してやったことがあるか、昔話を子どもに伝えたいと思うか、といった質問をする、という方法で調査した結果がまとめられている。この調査も詳細な調査日時は記載されていないものの、小学生の調査と同様に1960年代末の調査と推定され、こちらも調査人数は3456名にのぼる大規模な調査である。また調査対象者の属性は明記されていないが、対象者をどのように選んだかについては、「われわれの教室の子どもの母親にお願いし」と書かれていること、小学生のときに過ごしていた場所を質問として聞いていることから、小学生の母親を対象としているものと推定できる。

この調査では具体的な数値を示している部分は少ないが、年齢と小学生のときに過ごしていた場所については記載がある。それによると、年齢別では20代が147名、30代が2437名、40代が627名、50代・60代が19名となっており、地方別では東京都が1283名、千葉県が252名、茨城県が206名などとなっていて、関東地方が全体の64%を占めている。質問の中に、昔話を聞いたことがあるか、好きな昔話・きれいな昔話とその理由、といったものが含まれていることから、先にみた小学生の調査との関連性が高いことがわかる。

12 國學院大學栃木短期大學紀要

この母親を対象とした調査で、小学生の認知度の高さとの関係で特に注目すべき質問は「昔話をしてやったことがあるか」と「昔話を伝えたいと思うか」の2つである。これらはともにダイレクトに小学生の昔話の認知度に影響する行動であるが、前者は93%が「してやったことがある」、後者は90%が「伝えたいと思う」と回答している。このうち「昔話をしてやったことがあるか」という質問と同様の趣旨で「してもらった」側である学生を対象に調査した先行研究の中から、向田久美子、皆川晶の調査結果を表6に記すが、子どものころの読み聞かせ体験はおおむね70%程度となっており、母親を対象とした調査とはかなりの差がある。向田・皆川とも調査対象となった学生たちの子ども時代はおおむね2000年以降と考えられるが、それより30年ほど前の時代の母親たちは実際に昔話をしてやることも、また昔話を伝えたいという気持ちも、ともに非常に高い割合を示している。この理由については、いわゆる民話ブームやそれにもなう民話・昔話の本の出版点数の増加という当時の時代背景や、母親たちが子どものころ（30代の母親であれば戦争中から戦後すぐの時期）に昔話をしてもらった経験などが影響していると考えられる。

表6 子どもころの昔話・絵本の読み聞かせ体験に関する調査結果の例

出典	質問	対象	回答
向田 (2012)	昔話を読んでもらった体験	短大・保育専攻	よくある・ときどきある (60%)
向田 (2013)	昔話を読んでもらった体験	4年制・教養専攻	よくある・ときどきある (68%)
		短大・保育専攻	よくある・ときどきある (59%)
皆川 (2018)	絵本の読み聞かせをしたもらったか	短大・保育科	はい (67%)
皆川 (2021)	絵本の読み聞かせをしたもらったか	短大・保育科	はい (74%)

4.2.2 片山登美子による継続調査

片山登美子は1971年（片山、1972）、1981・1982年（片山、1982）、1991・1992年（片山、1994）と、10年おきに昔話の伝承に関する調査を行っているが、前述のようにこの調査には「知っている日本の昔話（民話）」「好き・きれいな日本の民話（昔話）とその理由」の質問を含んでいる。この調査は足かけ20年にわたって行われており、長期にわたって継続調査が行われているという点で、前稿で取り上げた「幼児の童話・昔話離れ現象」について1990年から2020年までの30年間にわたって実態調査を行った水野智美・徳田克己の研究（水野・徳田、2021-1、2021-2）と双璧をなす長期にわたる調査であるといえる。また調査対象は異なるものの、「子どもと民話調査委員会」の調査、片山の調査、水野・

徳田の調査という3つの調査をあわせて見ることにより、1960年代末から2020年までの50年間にわたる昔話の認知度の変化をほぼ10年おきに見ることができる、という点でも貴重な調査であると評価できる。

この継続調査の概要は以下の通りである。

① 1971年調査

対象：同志社女子大学家政学部2・3回生（20歳代）136名
その母親129名（40歳代79%、50歳代21%）

② 1981年・1982年調査

対象：同志社女子大学家政学部1・3回生464名

③ 1991年・1992年調査

対象：同志社女子大学家政学部1・3回生277名
その母親117名（都合により母親の結果は割愛）

この調査結果は片山（1994）で「知っている日本の昔話（民話）」として①から③までをパーセントで表示する形で掲載されているが、片山（1982）には①の結果を女子大生と母親に分けるとともに子どもと民話調査委員会の結果をも含んだ表が掲載されている。そこでこの2つの表からデータを抜き出し、これに本学の2021年度・2022年度調査の結果を加えた表7を作成した。なお表7の本学（國學院栃木調査）のパーセント表示の基礎データは1）の通りであり、表示形式は2）、3）のように処理した。

1) 調査人数

2021年度調査 日本文化学科24名、人間教育学科67名、合計 91名
2022年度調査 日本文化学科22名、人間教育学科38名、合計 60名

総計151名

2) パーセント表示は、認知度の調査結果の「熟知している」と「曖昧である」をあわせた数値を調査人数で割り小数点以下1けたで四捨五入したものである。

3) 表7は片山の1991年・1992年調査の上位11位までの昔話をベースとしたため、本学では調査対象としなかった昔話については「―」を記入している。なお、これについては片山1971年調査等、他の表についても同様の処理をしている。

表7 「知っている日本の昔話（民話）」の割合の変遷

調査名	片山継続調査				子どもと民話 調査委員会	國學院栃木 調査
	1991 ・92年	1981 ・82年	1971年 (女子大生)	1971年 (母)	1960年代末 (小学生)	2021 ・22年度
桃の子太郎 (桃太郎)	100%	100%	90%	90%	87%	100%
かぐや姫	100%	100%	74%	64%	—	—
浦島太郎	100%	99.8%	69%	64%	88%	99%
猿蟹合戦	98.9%	98.1%	60%	55%	75%	92%
花咲爺	98.6%	99.6%	74%	76%	84%	92%
一寸法師	97.8%	100%	65%	58%	88%	82%
おむすび ころころ	97.5%	96.6%	—	—	—	—
瘤取爺	97.5%	98.7%	41%	39%	78%	—
舌切雀	93.9%	99.4%	68%	60%	85%	63%
かちかち山	93.9%	98.1%	65%	65%	76%	—
金太郎	92.8%	98.5%	38%	34%	—	82%

表7により以下のような指摘ができよう。

- ①片山の調査対象は一貫して同志社女子大学家政学部であるが、1991・92年調査と1981・82年調査の数値は似かよっているものの、1971年の女子大生の数値は明らかに低い。
- ②2021・22年度の本学の調査結果はおおむね片山の1991・92年調査と同じ傾向を示しているが、舌切雀は明らかに本学の数値が低く、舌切雀ほどではないものの一寸法師・金太郎の数値も低い。片山の調査が4年制大学の学生を、本学の調査が短期大学の学生を対象としているという違いはあるが、実際にはほぼ同年代を対象としているので、比較する意味はあると考えられる。
- ③桃太郎の認知度は足かけ50年を超えるこれらの調査でも一貫して高く、桃太郎はもっともよく知られている昔話といえる。
- ④片山の1971年調査は女子大生と母親に分けて集計しているが、認知度はほぼ同じ傾向を示しており大きな差はない。ただこういう形での集計はこの一度だけであるので、この例をもって世代間の差について論ずる等の形で一般化することはできない。
- ⑤1960年代末と推定される小学生の認知度は他の調査と比べると話によるばらつきが少なくおおむね高い水準にあることがわかる。特にほぼ同時期の調査である1971年調査（女子大生）と比較すると、瘤取爺・猿蟹合戦・舌切雀・一寸法師・浦島太郎等は小学生の方がはるかに数値が高い。

このうち①について片山は、片山（1982）で「順位は昭和46年の女子大生と比較し、傾

向的に特に取り上げる問題はないが、各話の知っている率は今回の方が高かった。それは昭和46年には記述式で自由に書くことを依頼し、今回はその結果をもとに昔話名をあげ、○印で回答したからと思われる⁷とその理由を推測している。これは調査者本人の推測でもあり確かにそういう事情は考慮すべきだろうとは思われるが、たとえば金太郎が40%以下の認知度だったのに対し1981・82年調査と1991・92年調査の双方とも90%以上の認知度にはねあがっていることや、瘤取爺でも同様に40%程度から97%以上になっていること、一方では桃太郎や花咲爺はそこまで極端な差は生じていないことを考えると、自由記述方式から選択方式に変えたから、という理由だけでこれほどの数値の差となったとは言い難いように思われる。

そこで一つの仮説として考えられるのはテレビの影響、具体的には「まんが日本昔ばなし」の影響である。「まんが日本昔ばなし」は、1975年に日本教育テレビ（現：テレビ朝日）系列で放送され、のちに毎日放送、TBS系列（1976年～1994年、2005～2006年）で放送された⁸。この番組は日本各地に伝わる昔話を映像化し、市原悦子と常田富士男の二人だけで何役も兼ねる独特の語りで進行するというスタイルで評判を集め通算22年にわたって非常に多くの昔話が放送されるという長寿番組となった⁹。また視聴率の面からみても、年度別の民放マンガ番組の高視聴率ベスト10の調査（対象期間は1968年～1981年）¹⁰では、表8のように1976年から81年まで毎年ベスト10に名をつらねている。また「参考」として掲載したように『視聴率20年』（1982）出版以後も1984年には2位にランクされており¹¹、人気が続いていることがわかる。

表8 年度別・民放マンガ番組高視聴率ベスト10

年度	順位	局名	日時	視聴率	備考
1976	5位	TBS	11月27日	27.0%	1位は「サザエさん」(35.2%)
1977	2位	TBS	2月12日	29.6%	1位は「サザエさん」(36.6%)
1978	8位	TBS	2月11日	24.6%	1位は「サザエさん」(39.2%)
1979	5位	TBS	11月10日	26.8%	1位は「サザエさん」(39.4%)
1980	3位	TBS	9月27日	31.6%	1位は「サザエさん」(38.6%)
1981	3位	TBS	1月10日	33.6%	1位は「Dr.スランプ」(36.9%)
(参考)					
1984	2位	TBS	2月25日	30.4%	1位は「サザエさん」(32.1%)

また「まんが日本昔ばなし」は「広く児童健全育成の推進に寄与すると認められる児童福祉文化財または児童文化活動」を表彰する児童福祉文化賞にも以下の2回選ばれている¹²が、1975年に選ばれた18年後の1993年に再び選ばれているところからも、この番

組が長期にわたって定評のある内容で放送を続けてきたことがわかる。

●昭和 50 年 (1975 年) (第 17 回、49 年度の作品が対象) (毎日放送)

●平成 5 年 (1993 年) (第 35 回、4 年度の作品が対象) (毎日放送・愛企画センター・グループ・タック)

このほかにも、「視聴者に感銘を与え、放送文化の発展と向上に寄与した優れた放送番組・配信コンテンツ」を表彰する放送文化基金賞¹³ (第 4 回・1977 年度) の受賞や文化庁こども向けテレビ用優秀映画製作奨励金の交付¹⁴ など、優れた児童文化活動の推進という観点からさまざまな関係組織から高い評価を得ている。このように、①長年にわたって多数の昔話をまんが (アニメ) の形で放送していること、②放送当初から高い視聴率を得ていること、③厚生省・厚生労働省・文化庁などの中央官庁からも高い評価を得て表彰や奨励金の交付を受けていることなどから、「まんが日本昔ばなし」が子どもの昔話の認知度の向上に大きな影響をもっていた可能性は非常に大きいと思われる。水野・徳田 (2021-2) は、「家庭の中で童話や昔話に接する機会」として DVD や YouTube の影響を論じる中で「YouTube 等での映像視聴経験においても白雪姫とシンデレラは高い数値であった。しかし、この映像視聴経験についてはもう一つの特徴があった。「ももたろう」「おむすびころりん」「さるかに合戦」「うさぎと亀」「浦島太郎」「かぐや姫」などの、有名な日本の昔話の視聴経験も 10% を超えているのである。つまり、絵本を持っていない子どもであっても、映像を見ることによって、童話・昔話の視覚的理解をしている子どもが存在していることが示唆されるのである。この点については絵本の所持の有無、ビデオ・DVD の所持の有無、YouTube 等での視聴経験を要因にした分析を行い、今後、詳細に検討したい」(下線部は篠塚による) と分析しているが、YouTube 等に先行する昔話の映像視聴経験として「まんが日本昔ばなし」のもつ影響力は大きく、それが先に指摘した①、すなわち 1971 年調査 (「まんが日本昔ばなし」放送以前) と 1991・92 年調査および 1981・82 年調査 (放送以後) の数値の差に表れているのではないだろうか。この点については今後さらに詳しく検討していきたい。

5. 昔話の歌の認知度に関する考察

5.1 昔話の認知度と昔話の歌の相関

前回調査では、歌の認知度と昔話のあらすじの認知度には相関があるのではないかと考え、昔話のタイトルと同じタイトルの曲で調査した。対象とした昔話の歌は、唱歌や童謡と呼ばれている曲であるが、昔話の認知度調査との関連を踏まえ、同名の曲名が

けられている「桃太郎」「金太郎」「浦島太郎」「うさぎとかめ」「さるかに合戦」「雀のお宿（舌切雀）」「一寸法師」「牛若丸」「花咲翁」を「昔話の歌」（以下、昔話の歌）として調査した。尚、「舌切雀」は、タイトルが異なる「雀のお宿」が愛唱されていると考え、（舌切雀）と記載している。質問紙は曲のタイトルをのみ表記で、歌い出しの歌詞は記載しておらず、調査時に筆者らが歌を歌うことはしていない。前回調査を簡単に振り返ると、昔話の認知度が一番高い「桃太郎」（日本文化学科 95%、人間教育学科 84%）でも、歌の認知度は 50%（日本文化学科 46%、人間教育学科 43%）以下であり、昔話を「熟知」していても昔話の歌の認知度が低く、ほとんど相関がないということがわかった。また、それ以外の昔話の歌に関しても「知らない」割合が非常に高い結果となった。そこで、なぜ認知度が低いのか、先行研究や現在入手できる CD や歌の出版物等からも現状を把握した。その結果、先行研究でも本研究結果と同じような傾向が見られ、また現在出版されている楽譜等からも、昔話の歌の掲載が少なくなっていることがわかり、近年、昔話の歌が認知されなくなっているのではないかと考察した。

今回の調査における設問 3 の回答は、表 3 に示した通りである。昔話の歌の認知度を概観すると、前回調査と同様に「歌える」と回答している割合がとても低いことがわかる。その中でも「歌える」割合が 1 番高いのは、両学科とも「桃太郎」であるが、日本文化学科は 18%、人間教育学科は 42% で、両学科とも 50% を下回る。この結果は、前回調査とおおむね同じ傾向を示している。表 2 に示す「桃太郎」の昔話の認知度は、日本文化学科が 95%（「浦島太郎」も 95%）、人間教育学科が 84% と一番高い値であったが、昔話の歌の認知度は前述したようにならかなり低い。これも前回調査と同じように、昔話を「熟知」していても、歌は歌えないという結果が得られた。

「桃太郎」以外で「歌える」と回答しているのは、日本文化学科が「浦島太郎」9%、「金太郎」5%、「うさぎとかめ」5%、人間教育学科では、「うさぎとかめ」18%、「金太郎」5%、「浦島太郎」と「花咲翁」が 3% であり、両学科ともに低い値となっている。表 2 の昔話の認知度を見ると、日本文化学科は、「浦島太郎」95%、「金太郎」18%、「うさぎとかめ」77% となっており、人間教育学科は、「うさぎとかめ」63%、「金太郎」8%、「浦島太郎」71%、「花咲翁」37% であるから、昔話を熟知していても、前回調査と同じように、歌は歌えない、知らないという結果が得られた。特に、「浦島太郎」の昔話の認知度は、日本文化学科 95% が、歌になると日本文化学科 9%、人間教育学科では 71% の認知度が、歌になると 3% というのは、昔話と昔話の歌には、ほとんど相関関係がないと言える。

「歌える」「少しなら歌える」を合わせてみても、日本文化学科では、「雀のお宿」（舌切雀）

「一寸法師」「牛若丸」が0%となっており、人間教育学科よりも、歌えない値が高くなっている。これも前回調査と同じような結果となっている。

一方、表2で昔話を「知らない」と回答したのは、日本文化学科では、「雀のお宿」(舌切雀)14%、「牛若丸」18%、人間教育学科は、「金太郎」3%、「雀のお宿」(舌切雀)18%、「牛若丸」42%であったが、表3の昔話の歌は、日本文化学科では、「桃太郎」を除くと、「さるかに合戦」「雀のお宿」(舌切雀)「一寸法師」「牛若丸」の4曲について91%が知らないと回答している。人間教育学科でも、同様に「桃太郎」以外では、「さるかに合戦」87%、「雀のお宿」(舌切雀)92%、「一寸法師」90%、「牛若丸」97%、「花咲爺」84%であるから、両学科とも知らない割合が高いことがわかる。

以上のような結果は、昔話の認知度が一番高い「桃太郎」でも、歌の認知度は50%以下であり、昔話を「熟知」していても昔話の歌の認知度が低く、ほとんど相関がないということがわかった。また、それ以外の昔話の歌に関しても「知らない」割合が非常に高い結果となっており、前回調査と同じような傾向であることが考察できた。

5.2 調査後の人間教育学科学生の感想から

本調査に回答した「歌と楽器Ⅱ」「児童文化」の受講者は、保育士や幼稚園、小学校教諭を目指す学生である。本調査後に、徳田・水野(2021)、水野・徳田(2021-1)の「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態Ⅰ－30年間の絵本の所有率の変化－」等の文献を読み、調査項目で示した歌をCDで聴いた。その後、Google Classroomを使って、授業後の感想を自由記述で書いてもらった。その中の、学生たちの【認知度に関して】と【次世代へ受け継ぐ学生として】に関わるコメントを抜粋して、以下に示す。

【昔話と昔話の歌の認知度に対して】

- 私の家では親が読み聞かせを毎日やってくれていたもので、昔話を知らない家庭が多いことに驚きました。昔話は教育にもなるものだし、面白いので読んだことがないのももったいないと思いました。浦島太郎や桃太郎は読み聞かせのたびに歌っていた記憶があるので、それで覚えていたのだと思います。
- 想像以上に知らない人が多く驚きました。これが実態なんだと思うと結構深刻なんだなと思いました。金太郎の歌は有名だと思っていたので、知らない人が多く驚きました。
- プリントを読んでみて、年々認知度が減少していると知り、知っているつもりになっていた、聞いた事はあるけれど歌えない曲が多かったです。クラスの人もしっかりと私と

同じなのではないかと思いました。もっと今の子ども達に昔話を知って欲しいし、保育者になる私ももっと知っていかなければならないと思いました。

- 自分が一番知らないと思ってたけど、わりと知らない人が多くてちょっと安心した。昔話を知っていたり、歌を知っていたりする人はどこで知ったんだろうと興味をもった。
- 有名な日本昔話で知っていても歌は全く知らないことがわかった。また、歌があることすら知らなかった。

【次世代へ受け継ぐ学生として】

- 私は強制したい訳ではないけれど、保育の場で昔話という伝統を受け継いでいけるといいなと思います。
- 昔話や童話を、大人が子どもに読み聞かせることで、正しい物語の内容や情報を子どもたちに伝えていく、それを後の世代へと、どんどん伝え続けて行くことが大切だと感じました。
- なぜ、昔話が語り継がれているのか。その理由は「今でもその話が役に立つから」だと思います。例えば桃太郎は悪い鬼を退治するために、桃太郎、キジ、犬、猿で「力を合わせて目的を成し遂げよう」という教訓があるように感じます。子供が桃太郎を読むことで「社会勉強」「適材適所」を教訓とされているように感じます。昔話は子供の感性を豊かにするものであり、様々な思考を巡らせる良い材料なのかもしれないと感じました。

学生たちのコメントを見ると、学生自身やクラスの仲間の昔話や歌の認知度を知り、その低さに驚いたりしている記述が多い。そして、保育者や教員を目指す学生として、その実態の深刻さを示唆し、昔話や歌を次世代へ受け継ぎたいという気持ちやそうしなければならないといった使命感を表現している記述も見受けられる。学生が昔話に触れる子どもの頃の経験にも違いがあり、感性が豊かに育つ幼児期や児童期の環境が重要であり、家庭や保育、教育の現場における関わり方の大切さが指摘できる。また、昔話の内容を実生活の教訓と捉えるか、純粹に空想の世界を楽しむかに関しては、諸論があるため教育的要素の有無についてここでは触れない。本調査をきっかけとして、学生たちが昔話に興味をもち、読んだり、調べたり、歌ったりする中で、学生自身が伝承していくことの意義を考えていくことが重要ではないかと考える。

【引用・参考文献】

- 伊豫田康弘〔ほか〕執筆（1996）『テレビ史ハンドブック：読むテレビあるいはデータで読むテレビの歴史』自由国民社
- 岩沢文雄・小松崎進共編（1970）『民話と子ども』鳩の森書房
- 片山登美子（1972）「民話と教育」（その1）『学術研究年報』（同志社女子大学）23（2）. pp.112-140.
- 片山登美子（1982）「民話と教育」（その2）『学術研究年報』（同志社女子大学）33（2）. pp.148-177.
- 片山登美子（1994）「民話と教育」（その3）『学術研究年報』（同志社女子大学）45（2）. pp.219-242.
- 『視聴率20年』（1982）ビデオ・リサーチ.
- 徳田克己・水野智美（2021）「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態Ⅰ－30年間の絵本の所有率の変化－」『日本保育学会第74回大会発表論文集』. pp.165-166.
- 水野智美・徳田克己（2021-1）「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態Ⅱ－30年間の絵本の所有率の変化－」『日本保育学会第74回大会発表論文集』. pp.167-168.
- 水野智美・徳田克己（2021-2）「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態－1990年代からの30年間の変化－」『実践人間学』12. pp.11-25
- 皆川晶（2018）「昔話の認知度について－アンケート調査の分析を中心に－」『近畿大学九州短期大学研究紀要』48. pp. 54-64.
- 皆川晶（2021）「日本昔話に出てくることばの認知度について－保育科学生のアンケート調査の分析を中心に－」『近畿大学九州短期大学研究紀要』51. pp.45-58.
- 向田久美子（2012）「日欧の昔話の認知度（1）－短期大学生の学年別検討－」『駒沢女子短期大学 研究紀要』45. pp.39-47.
- 向田久美子（2013）「日欧の昔話の認知度（2）－専攻別の検討－」『駒沢女子短期大学 研究紀要』46. pp.33-40.

注

¹ 篠塚富士男・早川富美子・出井芳江（2023）「昔話と昔話の歌の認知度－短大生のアンケートから－」『國學院大學栃木短期大學紀要』57. pp.117-151.

² 構成比表示（％表示）は小数点以下第1位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない。なお本稿における構成比表示は、これ以降の表も表2と同様にすべて小数点以下第1位を四捨五入

しており、構成比表示のある部分は、これ以降についても構成比を合計しても必ずしも 100 とはならない。

- ³ 前掲、篠塚・早川・出井 (2023) p.138.
- ⁴ 岩沢文雄・小松崎進共編 (1970)『民話と子ども』の「子どもと民話 (二五〇〇名の調査から)」の章 (pp.84-96) の中に記載されている。
- ⁵ この調査では「知っているものに○」をつけさせているので、熟知していなくても○をつけている児童がいる可能性がある。そこで本学の調査結果の「熟知している」と「曖昧である」をあわせた形で比較することとした。
- ⁶ 岩沢・小松崎 (1970) pp.97-116.
- ⁷ 片山 (1982) p.156.
- ⁸ コトバンク (<https://kotobank.jp/>) に収録されているデジタル大辞泉プラスの「まんが日本昔ばなし」の記述による。(2023年11月27日アクセス。なお本稿で URL を記載している事項はすべて 2023年11月27日アクセスである)
- ⁹ この「まんが日本昔ばなし」で放送された昔話は全部で 1400 話を超えており、さまざまな方法で検索できるような「まんが日本昔ばなしデータベース」を作成・公開している例もある。<http://nihon.syoukougai.com/>
- ¹⁰ 『視聴率 20 年』(1982) ビデオ・リサーチ. pp.144-145.
- ¹¹ 伊豫田康弘 [ほか] 執筆 (1996) 『テレビ史ハンドブック:読むテレビあるいはデータで読むテレビの歴史』自由国民社. p.247.
- ¹² 「過去の児童福祉文化賞受賞作品一覧」(児童健全育成推進財団) <https://www.jidoukan.or.jp/project/activity/award>
 なお児童福祉文化賞は、昭和 34 (1959) 年に児童福祉週間を記念して、児童文化の振興を図るため、「優れた児童文化財に対して厚生大臣表彰を行うもの」として設けられ、昭和 63 (1988) 年からは朝日生命厚生事業団が厚生省の後援を得て主催者となり、平成 11 (1999) 年にはこども未来財団が加わった。さらに、平成 16 (2004) 年には、朝日生命厚生事業団に代わり児童健全育成推進財団がこの事業を継承している。(参考:「児童福祉文化財年報 令和 2 年度」p.21 https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo_kosodate/suisenjidoufukushibunkazai/data/jidou_cultural_honbun_R03.pdf)
- ¹³ https://www.hbf.or.jp/awards/article/sousaku_past
- ¹⁴ 「映画芸術の振興について (中間とりまとめ)」(文化庁文化部芸術課、昭和 63 年 7 月) に「文化庁子ども向けテレビ用 優秀映画製作奨励金交付作品一覧」が掲載されているが、それによると昭和 51 年度から 62 年度まで毎年奨励金が交付されている。https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/archive/pdf/93777601_02.pdf